



福岡のお金の歴史2,000年

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 お金との出会い～弥生・古墳時代～

日本人とお金との出会いは、今から約2,000年前の弥生時代に遡ります。日本列島でいち早く銭貨を手にしたのは、北部九州の人びとでした。その銭貨とは、中国大陸から持ち込まれた漢時代の五銖銭と新時代の貨泉などの銅銭でした。これらの中国銭は、日本での出土量も少なく、地域も限られることから、通貨としてより中国からもたらされた貴重な文物として受け入れられたと考えられます。その最も早い例は、弥生時代中期（紀元前1世紀）の遺跡である北九州市守恒遺跡から出土した前漢時代の五銖銭（紀元前122年初鑄）です。

弥生時代に日本列島へ持ち込まれた代表的な銭貨としては、新の王莽が発行した貨泉（16年初鑄）があります。貨泉出土の弥生時代の遺跡には、対馬のシゲノダン遺跡や壱岐の原ノ辻遺跡、糸島市の御床松原遺跡などがあり、貨泉が中国から壱岐・対馬の島々を経て北部九州にもたらされたことを示しています。

古墳時代の遺跡から貨泉や後漢の五銖銭（40年初鑄）が出土した例も報告されています。弥生時代に流入した銭貨が古墳時代まで大切に伝えられ、喪葬や祭祀などに用いられたと考えられています。その中には、朝鮮半島を経由して長い月日をかけて九州へもたらされたものもあったと考えられます。中世の遺跡から出土した例もありますが、これは大量に輸入された宋銭に混じって持ち込まれたものです。



上段：五銖銭（左）と貨泉（右2枚）

下段：左から和同開珎・万年通宝・富寿神宝（当館蔵）

2 本朝十二銭の鑄造～奈良・平安時代～

古代の日本は、中国の唐を手本とした国家体制を整えようとして、唐の進んだ文化を取り入れました。貨幣制度もそのひとつです。日本では、最初の国産の鑄造銭貨とされる「富本銭」に続き、和銅元年（708）に唐の「開元通宝」をモデルとして、「和同開珎」が造られました。和同開珎は、平城京を造営するために必要な物資や労働力の調達費用に充当されました。そのため、流通は当初、都城周辺に限られ、なかなか地方まで浸透しませんでした。しかし、次第に銭貨の便利さが認識されるようになり、「和同開珎」をはじめとして、奈良時代から平安時代にかけて12種類の銅銭が鑄造されました。これらの銭貨は、国家鑄造の統一通貨として、「本朝十二銭（皇朝十二銭）」と呼ばれています。

福岡県では、筑紫野市結ヶ浦火葬墓の蔵骨器から和同開珎、宮若市汐井掛遺跡の蔵骨器から和同開珎・万年通宝・神功開宝の3種、朝倉市大迫遺跡の火葬墓群から富寿神宝がそれぞれ出土しています。また、山岳信仰の聖地である太宰府市の宝満山山頂では、和同開珎をはじめとした本朝十二銭が採集されています。

古代の銭貨は、通貨としての役割だけでなく、お墓への埋納をはじめ、喪葬や地鎮、井戸、水路、道路の祭祀など、さまざまな祈りの場面で使われました。古代の人びとは、お金に不思議な力、つまり呪力が宿っていると信じていました。



蔵骨器と和同開珎 結ヶ浦火葬墓出土（当館蔵）

3 中国銭の大量輸入～鎌倉・室町時代～

銭貨の生産には、良質な銅と高度な技術の確保が必要でした。しかし、平安時代後期には、国家としてその生産を維持していくことが困難となりました。そこで登場したのが、中国の北宋・南宋で大量生産されていた良質な宋銭でした。当初は宋銭を私鑄銭として使用を禁じていましたが、国内での銭貨の生産と流通に行き詰まりをみせるにいたって、その使用を認めざるを得なくなりました。これにより、大量の宋銭が日本に輸入されることになり、劣悪な日本銭にかわり宋銭をはじめとした中国銭が日本列島を席卷しました。

宋銭は世界中に輸出されましたが、なかでも日本への輸出量は他の追随を許さず、宋自体が日本への輸出を禁じるほどでした。「新安沈船」で知られる朝鮮半島南西沖合から引き上げられた沈没船からは、総重量28トンの銅銭がみつかっています。この船は、元から高麗を経て日本を目指していた貿易船とされ、その荷主として博多の承天寺や宮崎宮が想定されています。

中国銭が大量に日本で流通していたことは、発掘調査からも知ることができます。中世の貿易都市・博多からは、その経済活動の活発さを物語るように、大量の中国銭が出土しています。九州の出土銭の約半分が博多、そして1割強を大宰府出土のものが占めます。太宰府市推定金光寺跡からは、唐の開元通宝から明の永楽通宝まで約千枚の銅銭が出土しています。

輸入された中国銭は、1枚1文として通用し、100枚もしくは一貫文にあたる1000枚を紐に通して縹銭としました。一括埋納銭の多くは、数本の縹銭を甕や壺に納め土中に埋めています。その目的については、戦乱を避けるための備蓄銭や神仏へ捧げられた埋納銭など、さまざまな可能性が指摘されています。

4 金・銀・銭の三貨と藩札～江戸時代～

戦国時代の度重なる戦乱により、貨幣経済は混乱をきたし、銭貨より金銀が重視されるようになっていきました。天下統一を果たした豊臣秀吉は、貨幣制度の整備に着手し、天正の金銀銭を発行しました。それを引き継ぐ形で江戸幕府も金・銀・銭(銅)の三貨を基本とする貨幣制度を整えました。それは、大判・小判・一分金・二朱金などの金貨、丁銀・豆板銀などの銀貨、寛永通宝・天保通宝などの銭貨を統一貨幣として幕府が発行・流通を一元的に管理するものでした。その交換レートは、金1両＝銀60匁＝銭4貫文でした。地域によって使い分けがあり、東日本では金貨、西日本では銀貨を主要な流通貨幣として用いました。前者を金遣い、後者を銀遣いといいました。つまり、九州は、大坂を中心とする銀遣いの経済圏に属していました。

江戸時代中期になると、地方でも藩札をはじめとした貨幣の発行が許可されるようになります。当初は幕府発行の三貨の不足を補い、領内の通貨量を調整することを目的に、三貨に対応して金札・銀札・銭札が発行されました。九州諸藩は銀遣いだったために、銀札が一般的で、大坂の商人らが札元となり、その信用によって藩札の流通が順調に行われました。福岡県では、小倉藩が延宝6年(1678)、久留米藩が天和元年(1681)、柳川藩が元禄元年(1688)、福岡藩が元禄16年(1703)、秋月藩がその翌年に藩札を発行しています。藩札は、生蠟会所や産物会所が領内の特産物である蠟や和紙などの専売品を買い上げるための資金として利用されました。時には藩財政の窮乏により藩札が乱発され、兌換できない事態も起こりました。

(学芸調査室 松川博一)



福岡県出土の中国銭(当館蔵)

江戸時代の金・銀・銭貨(久留米市蔵・当館蔵)

福岡藩札(当館蔵・朝倉市教育委員会蔵)



編集

発行：平成25年6月25日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>